

「外地で戦争を体験した母との思い出

— 夫と妻は針と糸、親の恩は順送り —

大久保愛子

私が数え年5歳さいの時、教師であった父の転勤先である満州まんしゅうへ一家そろって引っ越しました。「『夫と妻は針と糸』、妻は夫の行くところへは何処へでも行くことが、昔の女の勤めだった」と後に、母は言っていました。

その頃ころ奥地おくちの開拓団かいたくたんは平和で、父、母、次兄、私、それと生まれたばかりの妹の5人で生活をしていました。長兄と姉は、中学校、女学校に入っていたのでハルピンで寄宿舍暮らしでした。母も和裁教師の仕事が忙しくて大変だったとは思いますが、穏おだやかな毎日を送っていました。ただ一つ、悲しい出来事がありました。それは、1歳さいになったばかりの妹が、肺炎はいえんを患わずらって死んでしまったことです。村にお医者さんは1人いましたが、整った設備じゅうぶんも薬もなく、充分な治療ちりょうを受けずに死んでいった我が子を思う母の気持ちはどんなだったでしょう。このこと以外はとても幸せな家庭でした。

しかし、戦争はすべての人から幸せを奪うばっていきます。昭和20

年、私が小学校3年生の夏、ソ連の参戦により私たちのいる開拓団^{かいたくだん}は引き揚げ^あることになりました。そして夏休みのある日、村中みんなが安全な場所^{だっしゅつ}まで脱出することになりました。

農場の馬と馬車に生活用品と私たち子供や年寄りを乗せ、村人300人くらいが、行列を作って出発しました。引っ越してくるときとは反対の、山の中の道を歩きました。交通の便が良いところは、ソ連軍^{しんちゆう}が進駐^{しんちゆう}してくる可能性が大きいので、安全な山道を通ることにしたのです。

道のない山の中を歩くことになり、馬車を捨て、自分で荷物を持てるだけ背負って来る日も来る日も歩きました。1か月くらいたつとお米がなくなってしまう、木の実や草の根を食べました。赤ちゃんはお母さんのおっぱいが出なくなってしまう、いちばん先に衰弱^{すいじゃく}して死んでしまいました。それから、衰弱^{すいじゃく}して動けない病人が続出しました。

そんなときです、父も動けなくなっていました。今でもはっきり覚えています。私と父は衰弱^{すいじゃく}してみんなと一緒に^{いっしょ}歩けませんでした。母と兄は、先を急ぎねぐらの準備をすることになり、私と父は遅^{おく}れて歩いていました。夕方近くになり、あたりに霧^{きり}がたちこめ

ていました。「お父さんはもう歩けないから、ここで火を燃やしてあ
たろう。枯れ木を拾ってきなさい」。でも霧で湿っているので、火が
つきません。辺りには夕闇が漂い、冷え冷えとしていました。父の
衰弱しきった困惑顔、心細さ。すると、母はひき返してきて父を背
負ってよろけながら歩き出しました。誰もが衰弱していて、自分1
人で歩くのがやっとなのに、どうしてあのような力が出たのでしょ
う。父を思う愛の深さを感じます。

それから何日も、私は眠ってばかりいました。でも母と兄が、魚
を捕りに行ったのに1匹もいなかったことや、父と一緒に「海ゆか
ば」を歌ったことを覚えています。父が元気になったら後からゆく
ことにして、村人たちには先に出発してもらいました。秋も深まり
冬になるまでに山を抜け出さないと、みんな凍え死んでしまいます。
そんな中、父は亡くなりました。髪の毛と爪を遺骨の代わりにして、
毛布と木の枝を父にかぶせながら、母と兄は声をあげて泣いていま
した。私は放心状態で、悲しみを感じる力もなかったようです。

村人達の踏み分けていった後を頼りに先を急ぎました。「もう少し
お父さんの傍にいようよ」。「早く行かないと皆が歩いた後がわから
なくなってしまう。狼も居るし…」。母と兄の会話を耳にしながら、

ただふらふらと歩いていました。何日か経って人の声が聞こえました。それは、懐^{なつ}かしい村人達でした。

村人たちに合流したある日、今夜のねぐらを探しながら歩いていると、一軒^{いっけん}の家に灯りがみえました。「あそこへ行って泊^とめて貰^{もら}おう」。ところが、そこは恐^{おそ}ろしいところでした。数人の男がみんなを取り囲み、持ち物から着ているものまで全部取り上げてしまったのです。追いはぎです。寒い夜空で、裸^{はだか}で震えていました。

次の朝、霜^{しも}の降りた線路づたいを裸^{はだか}でかたまって歩いていると、着るものと食べ物を恵んでくれる人に出会いました。「どうせ引き揚^あげの時には持つてはいけないのですから、遠慮^{えんりょ}はいりません」。そう言ってくださったそうです。

その頃^{ころ}、一緒^{いっしょ}に机を並べて勉強した私の同級生で、たった1人生き残っていた男の子は、衰弱^{すいじゃく}して歩くことも出来ず、お母さんに負んぶされていました。垂れた足がブランブラン^ゆ揺れて、首が後ろにのけぞっていると思ったら、その子は死んでいました。衰弱^{すいじゃく}しきつて、泣き叫^{さけ}ぶことも出来ずに死んでいったのです。泣きながら負^おぶって歩いているお母さんを私の母は、なぐさめながら、埋葬^{まいそう}するところまで連れて行きました。

夜の冷え込みが強くなり、朝起きてみると隣となりに寝ねている人は死んでいた、というような毎日が続きました。今思えば、母は避難所ひなんじょ生活の厳しさには耐えられないと思ったのでしょう。現地の家庭で家政婦をするようになりました。夕方帰ってくるときは、何かしら食べ物をもたらってきます。その後、住み込みで働くようになり、私もついて行きました。栄養失調かかの私を抱えて、母は大変でした。

日本に帰れることになり、ハルピンまで行きました。長兄と姉がいた学校のあるところかいたくです。毎年夏休みには必ず開拓の村へ帰ってきていた2人ですが、村を引き揚げあげて以来、お互いに消息がわからないままでしたのです。姉の寄宿舍には、係の先生が後始末のために残っており、「終戦の前にみんなで日本へ帰りましたよ」という言葉を聞いて母は安心したと言います。

長兄のいたところへも行きました。母は、何か所か訪ねていったのですが、行方はわかりませんでした。引き揚げ列車あが出るので、「男の子だから、何とか1人で帰ってくるでしょう」と言って、探すのをあきらめました。

終戦翌年の昭和21年、黄色い花菖蒲はなしょうぶの咲く頃、長い長い避難ひなん生活を終えてやっと日本に帰ってきました。母も次兄も私も着の身着

のまま、2年間ろくに風呂にも入らず、もちろん髪も洗わず、ぞうきんのようになった服にはシラミがたかっています。荷物もなく、やせこけた亡霊のような姿で母の実家にたどりつきました。先に帰っていた姉や、祖母をはじめとする母の実家の人達が、暖かく迎えてくれました。でも、母の苦労はまだ終わっていません。まだ帰って来ない長兄の消息が心配です。また父亡き後、どのようにして生活していったらいいのでしょうか。母の得意な和裁では物資不足の折、生活できません。母は学友を訪ねて行商をしました。

そんな折、やっと日本に帰って来たのに、次兄は衰弱が回復せず、病気で死んでしまいました。しかし、悲しみに浸っている間もありません。母は身を粉にして働きました。そのせいか母は、胃けいれんの発作を時々起こして寝込みがちになりました。

私たちから1年後、みんなが心配していた長兄が帰ってきました。私たちと同じように体一つ、着の身着のままでした。

戦争は絶対にあってはならない事ですが、東日本大震災のように、いつ地獄が出現するかわかりません。あのとき、私の置かれた境遇には、地獄の中にも仏様のような人がたくさんいました。この恩は、母が口癖だった「親の恩は順送り」で、身近な人達にお返ししてい

かなければならないと思っています。そして、可愛い孫たちの未来が、平和で暮らしよい世の中であることを願っています。

(この文章は、平和教育は感受性の強い小学生以前から行うのが良いとの観点から平易な表現にしました。)

